

## “学生の学生による学生のための 心理学研究”の可能性

久保田 美 法<sup>\*</sup>

### はじめに

本学実践心理学科4年間の学びの集大成の一つに卒業論文・卒業レポート（以後、本稿ではこれをまとめて「卒業研究」とする）がある。教員から与えられた課題ではなく、これまでに学んできた知見を踏まえて、「自らテーマを選び自分の力で研究する」卒業研究は、能動性や主体性が求められ、研究者にならずとも「心理学をこれからの人生に活かしていく際の大きな手助けとなる。」（大橋・神，2016）。

卒業研究のテーマは基本的に自由だが、青年期の友人関係や恋愛のことなど、日常生活の中で気になることをきっかけにする者も多い。学生にとって身近なテーマには、どこか切実な思いが感じられることもある。

卒業研究の出発点に身近な問いがあるのは、当然であり自然かと思われるが、それを「研究」という組上に乗せるにはそれなりの手法があり、そこでは一度その問題を自身から切り離す必要がある。もとより思い入れが強すぎて、その思いに流されてしまっただけでは研究とは言えない。しかし、研究を進めていく中で、初めの問いからは離れてしまうこともあるだろう。もちろん、最初の問いはきっかけにすぎず、そこから展開させた新たなテーマに取り組むことにも意義がある。しかし、当初の実感を生かした研究、ある種の切実さにつながっている研究もあってよい。人間が生きる生の姿、息づかいが伝わる研究、「心に沁みる心理学」（吉田，2010）を卒業研究で行うことはできないだろうか。

筆者の担当するゼミでは、「じっくりくる音楽は何によって決まるのか」（島田，2014）や、「男女間における相手に愛されている・大切にされていると感じるとき」（熊田，2014）など、一人ひとりの感覚は異なると考えられるところに関心を抱き、そのテーマについて、友人にインタビューをすることが多い。インタビューは、自分が知りたいことをそのまま質問すると考えれば簡単なようだが、そもそも自分が本当に知りたいことは何か、それをいか

---

<sup>\*</sup>総合福祉学部 准教授

に話ってもらえるかは、なかなか難しい問題である。しかし学生たちのインタビューをみると、協力者の生き生きとした心の動きが伝わってきて、興味深いものが散見される。この面白さは何だろう。これは「研究」として、どのように位置づけられるだろうか。

こうしたことを考えていて思い当たったのが、近年、医療・福祉領域で広まりをみせている「当事者研究」だった。当事者研究には「生から乖離しないという原則」(池田, 2013)がある。青年期にある学生が、大学生の心理について考える研究は、「大学生という当事者」ならではの研究となる可能性がある。もとより青年期にある大学生が、青年期を対象とした研究をすれば、当事者研究となるわけではない。当事者研究には当事者研究独自の手法がある。本稿は、卒業研究を当事者研究と対比させることで、切実さから離れない卒業研究の、研究法としての位置づけと、その手法の意義や可能性について考えてみたい。

## I. 「学生の」内側からみえる景色

当事者研究とは、2001年に北海道の「浦河べてるの家」で始まった、精神障害を持つ当事者が、例えば妄想といった、自身が翻弄されているカオスの中に、一定の法則や秩序を「自分自身で、(仲間と)共に」(向谷地, 2006)見出していこうとする研究であり、現在では発達障害やアルコール依存症、身体障害など様々な障害を持つ当事者団体や自助グループ、社会運動団体などで行われ、国際的な広がりもみせているものである。

誰でも生きていけば、たくさんの苦勞に直面するのが当然であるにもかかわらず、診断名がつくような病気になった途端、その苦勞は専門家に丸投げされ、「その苦勞の意味」が当事者から奪われてしまう。その状況を憂いた当事者研究の原点には「苦勞や悩みを自分のものとして取り戻す」(向谷地, 2006)という発想がある。また当事者研究の「必須の動機は、どうしても解き明かしたい問題をもっているということ」であり、その基本性格には「悩みや課題をテーマに変換する」ことが挙げられている(池田, 2013)。

基本的に、卒業研究で研究テーマとするのは自らの「障害」ではない。しかし、普段の生活の中で何か「気になること」をきっかけとし、青年期を対象とした研究成果を学んでも違和感をおぼえたり、先行研究では触れられていない問いが出発点となることがある。

「若者の友だち関係は希薄化している」とされる言説に対して、「ずいぶん言われようである」と感じた東(2015)は、卒業研究の「はじめに」で以下のように述べている。

「高校生の頃、そうだと言われればそのような気もするし、かといって違和感も完全には拭いきれないような、複雑な感情を抱いていた。確かに自己の一面を、本心を隠すような形で用いるような『仮面』的な友だち関係も持っている。そこを指して『希薄化している』と言われるのであれば、それはもっともな話であるとも感じる。しかしなが

ら、自己の全面を見せるような、相談しあったり、将来などについて真剣な議論を交わしたりする友だち関係も持っていた。そこを指して『希薄化している』と言われれば、それは違うのではないかと考えていた。また、その間にあるような、一面的とも全面的とも呼べないような友だち関係も持っていた。この友だち関係は、自己を使い分けているが仮面とは思えず、かといって自己のすべてを見せているとも思えない、どんな関係性だと表現すればいいのかよくわからないものであった。結局、当時はその複雑な感情は脇に置き、思い出さないまま数年を過ごしていた。」

「そもそも若者の友だち関係や自己の使い分けは、『希薄化』した、していない、という点だけで測れるのかもわからない。一度このような視点を取り除き、『現代の若者』本人たちが、実際にどのように考え、友だち関係を取り結んでいるのかを明らかにする必要があるように思われる。」

また「現代の学生は進路選択において何を思い、感じ、考えているのか」をテーマとした澤田（2017）は、そのきっかけとして、ある面接で様々な質問を受け、答えに窮した体験をあげている。

「ほとんどは自身の未熟さゆえのことなのだが、その一方で求められている回答に違和感を覚えた部分もあった。」

「なぜその進路なのか、その『なぜ』の説明にあまりにも具体性を求めすぎているのか。」「職種や資格が豊富な現代において、『どれを選ぶのか』『何を選ぶのか』を考えることが重要なのは理解できる。」しかし、「まだこれからのことに『なぜ』や『どうして』をそんなに求められても答えようがない。むしろそうして無理に理由を求めた結果、就職や進学後に悪い事態を引き起こしてはいないのか。」

また「自分の事なのになぜ理解を深めてこなかったのか」という問いに対して、以下のよう述べている。

「しっかりと自分を見つめ直すのも大事だが、他人から自分を見てもらい、それをもとに自分でさらに考えて理解を深めていくものだろう。しかしそれにはそれ相応の人間関係が必要だ。（中略）今の若者がそうした機会を得られるのは、大人が想像している以上に難しいことのように感じる。」

2人とも研究者や大人の意見に対して一定の理解は示しつつ、自らの体験や実感からのズ

レを表明している。従来の「(青年期の)友人関係とはこうあるもの」「進路はこのように決めていくもの」といった、いわば「大人目線」では見えづらい面は確かにあるかもしれない。「大人目線」は、しばしば既にある価値観を基準にしたものである。そこからは測りにくい思いや体験もあるだろう。東(2015)はまた、従来の研究は「異なる世代(によるもの)であるがゆえに、従来の友だち関係との大きな差異などに目が向きやすいということもあるのではないだろうか」とも指摘している。

2人の言葉は、発達障害の当事者研究をしている綾谷(2010)の次の言葉と重なるように思われる。綾谷はアスペルガー症候群という診断名を得た当初、「名づけのありがたさを感じつつも、その一方で専門家によって記述される外側からの見立てによる特徴に納得できず、内部の自分から見える景色や、内側から感じていることとのズレに対する不満を抱えていた」と述べ、脳性まひを生きている熊谷(2010)と共に、自分たちの内側の体験を「つながりすぎる身体」と「つながれない身体」といった言葉で表している。

この「外側から」ではなく「内側から」という視点は当事者研究にとって欠かせない。「～とも思えず、～とも思えない」ような、しかし容易に説明ができなくとも、学生に確かに感じられているであろう様々な想いは、その内側からでない中々みえてこない。ここに、学部の卒業研究を「学生の当事者研究」の機会と考える重要な機縁がある。

## Ⅱ. 「学生による」学生へのインタビュー

### 1. 馴染みの友人に依頼するということ

当事者研究が障害のある自分自身を研究対象としているのに対して、本稿でとりあげる卒業研究は、自身を直接研究対象としているわけではない。しかし、その研究の出発点は自身の違和感や実感にあった。この実感は実際のところどうなのか、自分だけの感覚なのかを疑問に思い、他の人(自分と同じ学生)の考えや感覚を聴いてみたい。一人で自分をふりかえるのではなく、そのテーマを考えるために、他の人の体験を聴こう。これはいわば、「当事者の当事者によるインタビュー」と考えられる。

大学生の心理について大学生を対象にインタビューをする場合、その調査者が学生であるか、いわゆる研究者であるかによって、その協力者が語る内容は大きく異なるだろう。いわゆる「研究者」や「調査者」といった、学生からみれば「大人」である立場でないからこそ語られる学生の思いがあるはずだ。

本稿でとりあげる卒業研究では、インタビューは同じ大学生というだけではなく、基本的には馴染みの友人、知人に依頼している。それは質問紙調査を所属の学内で配布することが多いと同様、限られた期間の間に、協力者を探すのはなかなか困難といった現実的な制約もあるが、それ以上に、馴染みの友人だからこその利点もあるように思われる。

「『じっくりくる音楽』というのは、個人個人で異なることが多い」く「さらに普段は意識しない感覚的な面を考えて回答してもらわなければならないため」インタビューで深く聴くことが必要であったという島田（2014）は、対象者を馴染みの友人にした理由として、「①普段意識していないことについて語ってもらうことは、負担の大きいことであり、すでに信頼関係ができている方がスムーズに調査を行えると考えた。②インタビューに積極的に参加してくれると考えた。③信頼関係ができていることによって、筆者の考えに流されないと考えた。」とし、「③については、むしろ普段から筆者と関わりがあることによって、筆者の考えに流されてしまうように思われるかもしれない。しかし、普段から違うと思うことは、正直に伝えてくれる方に頼んだため、インタビュー中も筆者の考えに流されることはなかった。」と述べている。

もちろん、友人だからこそ話せることもあれば、友人だからこそ話せないこともあるだろう。インタビューの逐語を読むと、かなりハイテンションで、「○○いらねー（○○はいらぬ）」といった言葉や、「～したら～だと思わwww」〈www〉といった非言語的な文字が添えられている場面もあり——それでも「論文」としては不適切に思われて、割愛した箇所も多かったと言うが——それらは気を許した友人同士ならではの盛り上がりであるとともに、気恥ずかしさに由来したものでもあったかと推察される。

しかし「大人と子どもの境界——青年期における大学生はどちらなのか」をテーマにした佐藤（里）（2017）は、友人へのインタビューは恥ずかしい部分もあったとふりかえりつつ「しかし友人だからこそ真摯に向き合って応えてくれて、その人の表面と深層を行き来しているような感覚があった」という興味深い感想も述べている。

とはいえ友人をインタビュー対象にするということは、そこに「その学生の友人である」という一定の傾向があることは否めない。「友だちの使い分け」という、まさに友人関係の持ち方を友人に問うた東（2015）は、「今回のインタビュー対象者は、筆者が友だちに求める属性を持つ相手であると言い換えることも可能である」と考察し、その共通の属性についても書き添え、「筆者と友だち関係を持っている対象者であるからこそ、対象者の考える友だち関係の中において、筆者が存在する位置への思いなどについては、ほかされて語られた可能性もあると考察している。

しかし、同じ学生の友人であるという限られた対象者の中でも、語られたエピソードは一人ひとり異なり、その多様さに「驚きを隠せないでいる」と感じた東（2015）は、「対象者と同じく現代的な使い分けを行う筆者に驚きがあるということは、現代の若者の友達関係は、それだけの多様性を含んだ関係であるとも」言えるのではないかと述べている。大切なことは、対象者の「偏り」を減らすことなく、その対象者の傾向や特徴を丁寧に見ていくこと、そしてそこに普遍に通じるものを見出していくことであろう。



## 2. 「インタビュー」と「語り合い」

こうした友人へのインタビューに近いと考えられるものに、大倉(2002)の「語り合い法」がある。エリクソンらの青年期研究をレビューする中で、アイデンティティの変容プロセスの問題と、アイデンティティとは一体何なのかという問題はまだ明らかにされていないと感じた大倉は、「まずは今を生きる青年たちの生きざまに触れ、彼らが何を感じ、何を思いながら生活しているのか、日々どんな出来事に悩んだり、喜んだりしているのかをしっかりと把握することが必要だろう。そうした生活実感や彼らの人柄の中に、必ずアイデンティティやその変容プロセスを探るための手がかりがあるはずだ。いや、むしろ、そこにしかないはずだ」と考え、「普段はなかなかしないような人生観、世界観といったものについての『まじめな』話も含めて、その人の生き方というものに直に触れてみたい」という「好奇心」から、親しい友人と、そういったテーマについて継続的に「語り合う」という手法をとった。大倉は「当事者」という言葉は用いていないが、「外側から」聴くのではなく、今まさにアイデンティティ形成のさなかにある学生同士が語り合ったというその手法は、「当事者同士の語り合い」と言えるだろう。

大倉がこれを「インタビュー」とは呼ばず、「語り合い法」としたのは、「時には僕が研究的な質問をし、じっくり相手の話を聴くということもあれば、ときにはまったく対等な立場にある者として激しく意見をぶつけあったりもする。また、僕の方が自分の体験や思いを聴いてもらって、相手はただ黙ってそれを聴いていることもあるし、やっぱり二人で日常の些細な出来事で笑い合ったりしている時間も多し」ゆえに、「インタビュー」という言葉はどうもしっくりしないからであったと言う。

本稿で検討している卒業研究は、いずれも対象者に1回ずつ単発の「インタビュー」を行ったものであり、あらかじめいくつかの質問項目を考えた「半構造化面接」である。もちろん、語りの機会を重ねることによって、その語りの密度はより濃く、深まっていく可能性は高いが、ふだんから語り合う関係性がベースにある馴染みの友人に、あらためて話を聴くという「インタビュー」は、「語り合い法」に連なるものと位置づけられるだろう。

## 3. 共感をベースにした発見

これまでも述べてきたように、馴染みの学生同士のインタビューには、その協力者の心の動きが感じられる生き生きとした語りが見られることがある。それは、インタビュアーである学生の、そのテーマへの興味やその友人はどう感じているかという関心(聴きたい思い)と、その友人である学生の、問われれば語ってみたい(考えてみてもよい)思いがうまくマッチした時に生じているように思われる。

例えば音楽好きの島田(2014)が音楽好きの友人にインタビューをする。音楽に関する互

いの好みや嗜好性は知っていても、「じっくりくる音楽は何によって決まるのか」、普段から意識していることはそうないだろう。何がその時「じっくりくるか」といったことは、感覚としては確かにあっても、それを説明するのは難しい。しかし、音楽を日常で楽しんでいるという感覚の共有がベースとしてあり、そのことが、協力者が自身の「じっくり感」を探ることに寄与していたように思われる。

東(2015)の「友だちの使い分け」も「使い分け」と言えば、非常に意識的な行為のようであるが、実際は、必ずしもその都度明確な意図があるわけではない。その語りの中には、「～って感じかな」や、「その時点で使い分けがああ、されてる?」「～してるかなー」「～みたいな」といったように、“ふりかえてみれば、自分はこんな感じで(使い分けを)しているような気がする”といった表現が散見され、問われることで「何となく」だった自分の感覚にあらためて触れ、言葉にしようと試みられた跡がみとれる。

「現代の学生は進路選択において何を思い、感じ、考えているのか」(澤田, 2017)や「大人と子どもの境界——青年期における大学生はどちらなのか」(佐藤(里), 2017)といったテーマでは、その学生の迷いや、歯がゆさ、揺れ動き、もやもや感が感じられ、時には「何気ない疲労感」(佐藤(里), 2017)が漂うものだった。

インタビューでは、聴き手が予測していた内容を語らせてしまい、予定調和のような研究になってしまう危険性もある。が、聴き手である学生はしばしば、思いもしなかった感じ方や捉え方があることに驚き、また語ってくれた人、一人ひとりの内容が全く異なることへの興味関心を述べている。

例えば逐語には以下のようなやりとりが散見される。

「～ってさ、～じゃない?」〈うんうん〉

「でさ、～は～って思うんだよねー」〈ほおー〉

ここで「～じゃない?」の後の〈うんうん〉という応答は、“分かる分かる”という感じで、語り手の方も「～だよな?」と言われることがあらかじめ、想定・共有されている感覚があるように思われる。そうした感覚をベースに、「～って思うんだよねー」〈ほおー〉の〈ほおー〉は、“そう思うんだ!”という驚きと、“でも言われてみれば、そういう感じもあるかもしれない”, “この子の(性格等からすると)そう思うというのは分かる気がする”といった感じがうかがわれる。

このように、聴き手が語り手と横並びでオープンに聴き、自分と同意見だから共感するのではなく、自分とは違っても何か分かる感じがしたり、“そういう捉え方があるんだ!”と素直に驚く姿勢がみられ、それが「何となく」あった感覚が、互いに腑に落ちるものとし

て発見されることにつながっているようだ。

当事者研究は、もともと自身の体験を、一人だけで研究するものではない。「自分自身で、共に」(向谷地, 2006) 行われるものであり、「研究という形をとることで、多くの仲間を代表して、仲間と連帯しながら自分のテーマに迫っていける」ものである。学生同士のインタビューでは、聴き手が問いかけたテーマについて、語り手が感じるところを共に思いをめぐらせることで、そこで体験されていた感覚を形にしていく。「インタビュー」という形をとってはいるが、2人の間にあって、自分たち自身にかかわる共通のテーマや関心事のありかを共に探ろうとしているという点で、彼らは「当事者研究」をしているとも考えられる。

### Ⅲ. 「学生のための」研究

“自分たちを一括りにしないで、一面的にみないで”という思いから出発した卒業研究は、学生一人ひとりがある局面において「何を思い、感じ、考えているのか」(澤田, 2017), また、それらの思いはその時々で、どのように「使い分け」られているのか、その「外側から見えない繊細さ」(東, 2015) をリアルに描き出す。ふりかえると、筆者がこれまでみてきた卒業研究には、ある種の「使い分け」の様相を捉えようとしたものが複数あったことに気づく。

「大人と子どもの境界」をテーマとした佐藤(里)(2017)は、友人たちの語りからは「自分がまだ大人ではないことがありありと感じられたが、大人について嫌なイメージと言うより尊敬と憧憬の念が感じられ」たという、そのインタビューの中で、「自分の中の『大人パーセンテージ』(自分の大人度)」を尋ねたところ、そのパーセンテージは、「固定制(60%なら基本的に60%)」ではなく「変動制」であり、どの学生も、0%になることも100%になることもなく、「大人と子どものどちらにも所属している特性を活かして」、その2つを「場面場面で使い分けしている」と考察している。

熊田(2014)は、恋人から「愛されている」と感じる時と「大切にされている」と感じる時はどのように異なるか、またその感じ方に男女の違いはあるのかをインタビューした。これは自分が相手を「愛しているか」ではなく、どのような時に「愛されていると感じるか」という「受ける側」に焦点を当てたものであるが、「何をどう感じるか」は、やはりその人自身の「感じ方」であろう。男性とは異なり、女性は一人ひとり「愛されている」と「大切にされている」の感じ方が微妙に異なり、その繊細な感じ分けが示された点が興味深い。

またアニメのキャラクターやアイドルに恋心を抱く「疑似恋愛」を批判する風潮に対して、恋する気持ちや恋愛効果は変わらないのではないかと考えた鶴沢(2015)は、「疑似恋愛は有りですか、無しですか。またどういうところが有りですか」を問うた。「疑似恋愛」が単純に「有りか無しか」ではなく、「どういうところが有りか」を尋ねている点が注目される。また疑似恋愛体験者の「疑似恋愛をしていた時の自分は弱っていた」という語りと、



そのことはこれまで口外されていなかった点を取りあげて、「疑似恋愛は自分の中で完結させるもの」であり、「疑似はあくまで疑似であり、上手く活用していく方法があるのではないだろうか」と結んでいる。「上手い活用の仕方」は「使い分け」と通じているであろう。

「疑似恋愛」はバーチャルとリアルの問題でもあるが、佐藤（結）（2017）は、ロボットが高度に発達してきた現在、アンドロイドのロボット映像を見せて、「人間っぽさ」と「ロボットっぽさ」を問うことで、「人間にしかないもの」「人同士のふれあいによってしか生まれないもの」を人はどう感じているかを探ろうと試みた。

インタビュー協力者の中には、ロボットと人間は「明確に違う」とする人も、「その境はない」という人もいたが、良い意味でも悪い意味でも人間ならではのこととして「感情」が挙げられており、「負の側面を語っても、なくなってしまう方がいいとは言っておらず、むしろ有効に利用させてもらっているようなところがある」と考察している。「感情とは面倒なものだな」と感じていた時期もあるという佐藤は、しかしインタビューを経て、あらためて「感情が元のエネルギーとして存在しているからこそ、そこから理性的なものをくみ上げ、自分は何をしたいのかを思考することが出来るならば、感情があることではなく、感情をどのように使うかが、自分が人間としてどのように存在することになるのではないか」と述べている。

自分の感情を「どのように使うか」、あるいは疑似恋愛も「活用の仕方次第」とは、それを使う主体への信頼があってこそ言えることであろう。あるいは、様々な「使い分け」や「感じ分け」を繊細に行っている、その主体を応援するまなざしとも言えるだろうか。

「使い分け」や「感じ分け」は、自分の意志が必要とされる面と、無意識に行われている面とがある。「じっくりくる音楽」は「常に変化していくもの」（島田，2014）というが、この「じっくりくる」とは、まさに意識と無意識とが対話しながら、その都度決まっているものであろう。どのような時に何がじっくりくるかは、時々刻々、自分を支え寄り添ってくれるものが何であるかを知ろうとすることでもある。

そもそも人間が生きている現実には、多面的・多層的なものである。それがより複雑化している現代において、その時々「使い分け」「感じ分け」の様相を探ることは、それ自体、自分が自分を生きるための研究でもあると考えられる。

#### IV. 「学生の学生による学生のための研究」の可能性

##### 1. 当事者でない者にも「引き寄せて分かる」感覚

「学生の学生による学生のための研究」は、果たして「学生のため」だけのものであろうか。もしそうだとすれば、それは「研究」としてはやはり片手落ちとなる。その出発点に「私たち学生の不安を知ってほしい、共感してほしい」（佐藤（里），2017）という言葉がよく見られるように、卒業研究は、学生の意識的な動機としては、自分たちの心理を広く社会に伝え、

理解を求める方がむしろ強いように思われる。当事者研究もまた、その障害の「引き受け方を仲間と共に研究し、その成果を社会に伝える」(石原, 2013) ことを目指したものであり、その体験世界へ他者を誘うためには、当事者の生の語りが必要とされるものであった。

熊谷(2009)は、脳性まひという障害をもった自分が転倒する時の体験を詳細に描き、「『脳性まひ』だとか『障害』という言葉を使った説明は、なんだかかわかったような気にさせる力を持っているが、体験としての内実が伝わっているわけではない。もっと、私が体験していることをありありと再現してくれるような、そして読者がそれを読んだときに、うっすらとでも転倒する私を追体験してもらえよう、そんな説明が欲しいのだ」「つまり、あなたを道連れに転倒したいのである」という興味深い記述をしている。

また発達障害の当事者研究をしている綾屋(2010)は、統合失調症者の当事者研究を読み、「当事者発信の言葉は、他の人にも『あ、これならわかる』と、自分の中に生じるあの感覚の延長線上にあるのではないかと引き寄せてわかる感覚がもてる」と述べている。

「学生の学生による学生のための研究」は、当事者目線であるからこそみえる、現代の学生の心理を一般にも伝える面がある。のみならず、学生の生の語りは、様相は異なれど、時代を超えて私たち誰もが持っているであろう、内なる青年期心性に響くものがあったり、あるいは、同じく現代という時代を生きる人間にとって、その感覚の「延長線上に」引き寄せて「わかる」感覚がもてることもあるのではないだろうか。現代の学生による学生の心理の研究が示す彼らの姿は、彼ら自身にとっても、今はもう学生でない者にとっても、社会にとっても、その理解を深める手立てになる。

## 2. 専門知との関係

最後に、当事者研究は専門知からは離れたものなのかという問題に触れておきたい。専門知は体系的で網羅的なものであるが、石原(2013)は「当事者研究は必ずしも専門知と対立するものではなく、「専門知の成果を一応は受け入れながらも、その意味を当事者の視点から捉えなおし」「その意味をずらしていく」「これまでになかった知のあり方」であると述べ、また池田(2013)は「このような知見を専門知がどのように評価し、取り込んでいくのかは、専門知の側の課題であろう」と述べている。

本稿では、学生の時期だからこそできる、学生の心理の研究があることを考察してきた。馴染みの友人同士のインタビューが、専門的な心理学研究で行われることは稀であろう。当事者の語りにおいて、当事者の体験の仕方や主観に意義があることは、これまでに触れてきたが、当事者同士のインタビューでは、その聴き手の主観も重要である。

池田(2013)は「主体的実践として語られるような当事者研究のかたちを、本物の研究と認めることに抵抗感を覚える人も少なくはない」が、「体験の当事者たちが現実の実践の中

から語り出している体験理解の網の目を、客観化が締め出してしまうとしたら、体験の研究としては一面的なものになってしまう」と述べているが、このことは「語り合いの一環である調査者」（大倉，2002）についても言えるであろう。

またインタビューによる研究は質的研究であり、質的研究にはいくつかの代表的な分析方法があるが、今回とりあげた卒業研究では、そうした手法は特にとらず、素朴にインタビューの逐語と向き合い、何度も読み返し、インタビューで自分が感じていたこともふりかえりながら、研究の目的と照らし合わせて、大事に思われるところを抜き出して整理し、それぞれの考察を書いている。

大倉（2008）は、「本来質的アプローチというのは、自分が現象の何を、どんな形で明らかにしたいのか——つまり、現象のどんな『質』を問題にしたいのか——を突き詰めていく作業と、同時並行的に深まっていくもの」であり、「先にアプローチがあって、それにしたがってデータ処理をすれば質的研究になるといったものでは決してないはず」だと指摘している。今回とりあげた卒業研究は、そうした「突き詰めていく作業」の途上にあるものであるが、必ずしも心理の「専門家」を目指しているわけではない学部段階の学生だからこそ、気負いなく、「本来的な質的アプローチ」に取り組みやすい面はあったかもしれない。

何が「専門的」で、何が「本来的」なのかは非常に難しい問題であり、本稿で論じ尽くすことはとてもできない。ただ、少なくとも「専門知とは対立せず」、質的アプローチとして非常に大切なところに取り組みやすい条件が学部時代にはそろっているということは言えるのではないか。学部時代ならではの「学生の学生による学生のための心理学研究」は、心理職に進むにしろ、また別の道を歩むにしろ、それに取り組んだ学生にとって、一つの糧になりうるとともに、新しい知を提示する可能性があると考えられる。

### 引用した卒業研究

- 東春花（2015）「使い分けられる友だちの心理——外から見えない繊細さ」
- 熊田由（2014）「男女間における相手に愛されている・大切にされていると感じるとき」
- 佐藤里保（2017）「大人と子どもの境界——青年期における大学生はどちらか」
- 佐藤結花（2017）「人同士の触れ合いにより生まれる効果について」
- 澤田樹林（2017）「現代の学生は進路選択において何を思い、感じ、考えているのか」
- 島田亮介（2014）「じっくりくる音楽は何によって決まるのか」
- 鶴沢育美（2015）「疑似恋愛とリアルな恋愛の効果の違いは存在するのか」

### 文献

- 綾屋紗月・熊谷晋一郎（2010）つながりの作法—同じでもなく違うでもなく、NHK出版
- 池田喬（2013）研究とは何か、当事者とはだれか—当事者研究と現象学、石原孝二編「当事者研究の研究」、医学書院
- 石原孝二（2013）当事者研究とは何か—その理論と展開、石原孝二編「当事者研究の研究」、医学書院
- 熊谷晋一郎（2009）リハビリの夜、医学書院

- 向谷地生良・浦河べてるの家 (2006) 安心して絶望できる人生, NHK出版  
大橋靖史・神信人編 (2016) 実践的な心理学の学びかた, ナカニシヤ出版  
大倉得史 (2002) 拡散diffusion「アイデンティティ」をめぐる, 僕達は今, ミネルヴァ書房  
大倉得史 (2008) 語り合う質的心理学—体験に寄り添う知を求めて, ナカニシヤ出版  
吉田章宏 (2010) 心に沁みる心理学 第一人称科学へのいざない, 川島書店

## Notes on “The Psychological Study of the University Students by those Students for those Students”

KUBOTA, Miho

The purpose of this paper is to consider a hopeful method for graduation study of psychology by university students.

While the knowledge of psychology of youth is often different from what recently university students really think and feel in their daily life, the narrative of their mental scenery is touching and can be a new light on their familiar problem. To use such vivid narrative for their graduation study, the method of “self support study”, which has fairly wide knowledge in medical welfare field, is referred to and the effectiveness of the method is also examined.